

# シェイクスピアの研究

中野春夫

本年度より加藤行夫先生を引き継いで中野春夫が本欄を担当させていただくことになりました。目が届く限り多くの成果を取り上げられるよう心がけますので、どうぞよろしくお願いたします。

昨年度出版された成果(2013年4月～2014年3月)のうちまず目を引くのは、エリザベス朝演劇研究を牽引してきた世代による重量級の著書4点である。以下出版年月日の順序で挙げるが、川井万里子『「空間」のエリザベス朝演劇——劇作家たちの初期近代』(九州大学出版会、2013年6月)はシェイクスピアやベン・ジョンソンなどの作品12本を、旧修道院不動産やロンドンの商業街など「空間」と関わるさまざまな対象に着目して論じた大作である。どの章でも地名と用語などが丁寧に説明され、読者を思わず知らずのうちに400年前の作品の中へ誘いこむ。例えば第5章と第6章は充実した先行研究の調査を通じてオランダ人移民の実態を紹介し、その上で『靴屋の休日』などに現れるオランダ人表象の特性、さらには劇作品に投影する移民に対するアンビヴァレントな感情と偏見の生成過程をも具体的にあぶりだしていく。上記のオランダ人移民や第2章の旧修道院不動産所有権など、論点および対象の選択が非常に洗練されている。

玉泉八州男『北のヴィーナス——イギリス中世・ルネサンス文学管見』(研究社、2013年8月)は中世期から王政復古期までイギリス文学(章によってはヨーロッパ文学まで議論を拡げて)の展開を「カトリック」や「国際武闘派」など魅力的な対象を選んで系譜学的に論じた刺激的な一書である。副題で「管見」と謙虚に謳われているが、チョーサーやワイアットがどのようにイタリア・フランスの最先端文化を受容した結果どのようなイギリス宮廷恋愛詩の伝統が形成されたのか、あるいは中世聖体劇と呼ばれる劇作群の枠組みがどのような宗教的背景、あるいは中世商業都市の現実的な諸事情から生み出されていたのかなど、イギリス文学の巨大な幹の姿が個々の作品分析と併せて絢爛な絵巻模様のように描き出されていく。ルネサンス期のイギリス文学についてマクロレベルでの知識を提供できる研究書は当分の間、本書だけであり続けると思う。

山田昭廣『シェイクスピア時代の読者と観客』(名古屋大学出版会、2013年11月)はシェイクスピア時代における演劇受容の在り方を根本からとらえなおそうとする真摯かつ意欲的成果である。シェイクスピア時代でも演劇は一義的に観るもの(あるいは聞くもの)として存在していたはずだが、同書が強調するのは16世紀後半期から読

## 回顧と展望

み書き能力が飛躍的に向上し、今日の私たちのように演劇を読んで楽しむ受容形態もすでにこの時期から着実に形成されていた事実である。ロンドンの推定人口や識字率など様々な数値を上げながら書籍への関心あるいは読み書き能力への憧憬が16世紀後半期以降の演劇作品においてどれだけ深く刻み込まれていたかを論証していく過程は豪快であり、圧巻とさえ言える。とくに活字文化の影響をシェイクスピア劇において具体的な台詞分析を通じて網羅的に論証する第2章は、どの程度の量のデータをどのように提示すれば豊かな説得力を持つようになるかを示してくれるお手本のような成果と言える。

青山誠子『シェイクスピアいろいろ』（開文社出版、2013年12月）は著者の長年にわたって築き上げてきたシェイクスピア研究の成果を凝縮して一冊にまとめあげた労作である。6章構成で伝記や時代背景、さらには主要な上演が手際よく論じられる一方、主要な女性登場人物とその特徴が丁寧な解説されたうえで、ほぼすべての作品の抑えどころが言及されている。驚異的なのは高校生でも理解可能と思われるほど語り口が平明でありながら、内容そのものはまさしく研究者対象のレベルを保っていることである。シェイクスピア劇を明晰に説明するには枝葉末節の情報をどれだけ削ればいいのかを示してくれる点、若い世代に特に薦めたい貴重な成果。とくに女性登場人物個々の特性を簡潔に解説した第3章はシェイクスピア喜劇を論じる場合には引用しなくとも、目を通しておくのが当たり前となるだろう資料である。

近年増えてきたのが学会や共同プロジェクトなどで開催されたシンポジウムの成果を発展的にまとめた企画論文集であり、昨年度は企画と編集がともに優れた2点が刊行された。

松田美作子編著『イメージの劇場——近代初期英国のテキストと視覚文化』（英光社、2014年2月）はルネサンス期の文学テキストがエンブレムなど同時代の視覚表象物との間で密接かつ重要な相互影響関係を結んでいたことを指摘し、従来のエンブレム研究の成果を作品分析に応用する道筋を示してくれる点で貴重である。以下が同書に収録されている8本の論文である——マイケル・バース「スコットランド女王メアリのエンブレムの刺繍」、「『四季』のタピスリーにおけるエンブレムの応用」、蓮池藍「戯曲を操る装身具——シェイクスピア劇を中心に」、松田美作子「『ヴェニス商人』における Fortune と fortune——usance と interest を巡って」、牧野美季「『オセロー』におけるデズデモナ表象」、植月恵一郎「異界探訪——竜退治のイメージについて」、高橋三和子「近代初期イギリスのヨーロッパ及びレヴァント地方旅行記における図版の使用」、伊藤博明「インプレサからエンブレムへ——フランシス・ベイコン『大革新』のフロンティスピースとその文化的背景」。

『シェイクスピア 古典文学と対話する劇作家』（松籟社、2014年2月）は4名の執筆者が役割分担を明確にして、シェイクスピアと古典文学との関係を包括的に教示し

## シェイクスピアの研究

てくれる啓蒙的な論文集である。どの論文もシェイクスピアによる古典受容の具体例を丁寧に解説してくれ、古典の影響を踏まえた場面と台詞のきめ細やかな解釈それぞれが優れた業績になっている。以下に4本の論文を挙げる——杉井正史『『メナエクス兄弟』と『間違いの喜劇』の比較』、廣田麻子『『十二夜』にみられるオウィディウスの影響——ナルキッスとエーコー』、高谷修『『ヴィーナスとアドーニス』と古典文学』、小林潤司『シェイクスピアとエクブラシス』。

単著の成果としては、さらに以下の3点を紹介したい。西尾哲夫『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』（みすず書房、2013年11月）はアラブ民族学を専門とする著者ならではの研究成果であり、『ヴェニス商人』の材源についてアラブの民話を含めてきわめて充実した情報を提供してくれる。河合祥一郎『あらずじで読むシェイクスピア全作品』（祥伝社、2013年12月）はシェイクスピア劇に潜在的な関心を持つ一般読者を対象にしたと思われる著書。劇作品40作のほか詩作品の解説も入れているところが玄人芸を感じさせ、登場人物間の人間関係を図式化した工夫も面白い。小野俊太郎『本当はエロいシェイクスピア』（彩流社、2013年12月）はタイトルこそ商業的な匂いを感じさせるものの、内容はシェイクスピア劇における性的交渉、売春、異性装、レイプを学術的に論じた研究書である。シェイクスピア劇の恋人たちの行動が今日の社会であればどのような行為に相当するのか、この種の情報に関する軽妙な解説が読ませる。

日本シェイクスピア協会の会報 *Shakespeare News* (2015年度から総合学術雑誌 *Shakespeare Journal* に衣替える) はここ数年学術誌の性格を強めて特集を組むようになり、Vol. 53, No. 1 (September 2013) は「歴史劇特集」として5本の論文を収録している。森祐希子「歴史劇における庭——テンプル法学院の庭を中心に」は園芸の比喩と薔薇の象徴性に注目して『ヘンリー六世・第1部』の「法学院の庭」場面(第2幕第4場)における喪失感のイメージを精緻に再現し、『ヘンリー六世』三部作全体で反復される「喪失」という中心旋律を明快に指摘してくれる。石橋敬太郎『『エドワード三世』における騎士道精神とその時代性』は史実と劇世界の記述を詳細に比較することにより、エドワード三世時代の王国史がエリザベス一世時代の政治背景から国威発揚的な騎士道ロマンス演劇へと作りかえられたプロセスをダイナミックに論証している。勝山貴之「歴史劇と初期資本主義経済——*Richard II*における“property,” “credit,” “bankruptcy”」は国王リチャード二世の致命的な失政が「信用」「破産」など資本主義の基礎概念および用語で表現されている現象に着目し、『リチャード二世』がシェイクスピア時代のイングランド社会に起こりつつあった経済社会制度の大変化を投影している現象を骨太な議論でダイナミックに論証していく。廣田篤彦「フランス人かぶれの宮廷人と宗教改革——『ヘンリー八世』における服装の諷刺とイングランド人アイデンティティ」はウィリアム・ハリソンの『イングランドの記述』など豊富

な資料を縦横無尽に引用しながら、イングランド人のアイデンティティの揺らぎという扱いが難しい対象を巧みに読み解く。中野春夫「歴史劇受容の特異性——これまでとこれから」は歴史劇受容の特異な歴史を振り返り、今後の歴史劇研究の在り方を論じた。

同じく *Shakespeare News* の Vol. 53, No. 2 (March 2014) は内丸公平「岡倉由三郎のシェイクスピア——翻訳『盤陀付鑄掛大名』に見る受容原理の考察」を収録している。同論はシェイクスピア劇受容をめぐる岡倉由三郎独特の興味深い「国粹的」な翻訳理念を紹介し、日本版「英文学」が抱えた葛藤の起源を実証的に指摘している。

日本シェイクスピア協会の英語版学会誌 *Shakespeare Studies*, Vol. 51 (March 2014) に収録された Kazutaka Tanaka “The Multiple Structure of Robert Greene’s *Friar Bacon and Friar Bungay*: A New Perspective” は『修道僧ベイコンと修道僧バンゲイ』における多層的構造をオクスフォード大学の伝統的なアカデミズムなど同時代のコンテキストから指摘した英語論文。テキストに寄り添った緻密で実証的な分析が印象深い。

『英文学研究 支部統合号(第6巻)』(2014年1月)には各支部から合計4本のルネサンス文学関連の論文が収録されている。石橋敬太郎「*Bussy d’Ambois* における自然と人間」(『東北英文学研究』)はチャップマンの『ブッシー・ダンボア』を人間と自然との関係という根源的なテーマから正攻法で論じた示唆的な論考である。喜多野裕子「“May the winds blow till they have wakened death”——*Othello* におけるバラッド歌唱場面の劇的機能」(『関西英文学研究』)は『オセロ』の二つのバラッドに焦点を合わせ、その効果を明晰に論じている。同じく『関西英文学研究』に収録された今西雅章「エリザベス朝の独得の劇場空間とシェイクスピア的表現力——聴覚的效果と視覚的效果」は台詞(聴覚的要素)と演技・大道具(視覚的要素)の共同作業というエリザベス朝演劇上演における核心的な現象をシェイクスピア劇の場면을例にとりながら具体的に掘り下げていく重厚な論文。杉浦裕子「ベン・ジョンソンの『へぼ詩人』と少年劇団」(『九州英文学研究』)は少年劇団と関わる論点を丁寧に整理、再検討したうえで、ジョンソンにとって少年劇団がもっていた意味を新たに提示した骨太で野心的な論考。

紀要等に発表された論文は以下である(姓名の50音順)——小野良子「〈女らしさの神話〉とハリウッド・シェイクスピア——1967年の『じゃじゃ馬馴らし』」(『英米評論』, 桃山学院大学総合研究所)。勝山貴之「『アントニーとクレオパトラ』とエジプト——近代初期英国におけるエジプト表象と劇作家の手法」(『主流』, 同志社大学英文学会)。近藤直樹「歴史という題材——Aphra Behn の *The Roundheads* 論」(『言語文化科学研究』, 大阪府立大学人間社会学部言語文化学科)。田邊久美子「シェイクスピアの作品における移動と空想」(『移動する英米文学』, 英宝社)。辻川美和「ジョン・フレッチャーの劇における男装——観客操作の方法とコンヴェンションの利用法の変遷」(『ほ

## シェイクスピアの研究

らいずん』, 早稲田大学英米文学研究会). 鶴田学「民話と説教の不都合な融合——『ヴェニス商人』材源再考」(『人文論叢』, 福岡大学研究推進部), 中野春夫「伝説の浮浪者王コック・ローレル——十六世紀イングランド社会における浮浪者像の生成」(『研究年報』, 学習院大学文学部), 西出良郎「ローマ史劇の方法——『ジュリアス・シーザー』と『セジェイナス』」(*Albion*, 京大英文学会), 前沢浩子「シェイクスピア——遺産から資産へ」(『獨協大学英語研究』, 獨協大学外国語学部英語学科).

また英語論文には以下のものがある(姓名のアルファベット順)——Hanako Endo, ‘The Tragedy and Alcoholism in *King Henry IV, Part 2*’ (アレーテイア, アレーテイア文学研究会); Wataru Fukushi, ‘The Relapse and an End of the Restoration Comedy’ (*Shiron*, Tohoku University); Adam Hailes, ‘Locating the Aesthetic in Shakespeare’s *Macbeth*’ (*Bulletin Faculty of Foreign Studies*, The University of Kitakyushu).

作品の翻訳では松岡和子訳『ヘンリー四世・全二部』(ちくま文庫)と河合祥一郎訳『新訳・夏の夜の夢』(角川文庫)が刊行された。どちらの訳も日本語として違和感なく聞こえ、かつ聴覚的な効果が細部にいたるまで意識された優れた成果である。研究書の翻訳ではS. グリーンブラット『シェイクスピアの自由』高田茂樹訳(みすず書房)(訳註が充実している), エリック・ラスムッセン『シェイクスピアを追い!』安達まみ訳(岩波書店)(住本規子氏の解説も面白い)がある。

(学習院大学教授)